

かわせみ通信

発行：神奈川県自然環境保全センター
自然保護課

住所：神奈川県厚木市七沢657

TEL：046-248-6682

※野外施設の情報は、ホームページでも紹介しています。

野外施設自然情報

自然環境保全センター 生き物 検索

自然環境保全センターの野外施設には、身近な自然を観察できる自然観察園（昭和57年オープン）と、樹木一つ一つをじっくり観察できる樹木観察園（旧林業試験場時代の約50年前に整備）があります。

野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にふれることができます。

この「かわせみ通信」では、野外施設の出来事や生き物たちの様子を紹介しています。

<カワセミの縄張り争い>

コバルトブルーの美しい羽にすんぐりしたかわいいフォルムの、自然観察園のアイドルといえばカワセミ。実は激しい気性の持ち主という一面があるのをご存じでしょうか。11月31日に園内で2羽のカワセミがほぼ一日中、激しく争っている様子が目撃されました。相手にかみついたり、池に沈めるかのように抑え込んだりしていました。

カワセミは下のくちばしが黒いのがオス、赤いのはメスです。冬、個々にえさ場としての縄張りを持つ鳥は雌雄関係なく縄張り争いをするものが多いので、この争いも「縄張り争い」だったのではないかと考えられます。

一時はお互い近くにとまっても気にしないという場面もあり、今後仲良くなって、つがいになるかもと期待されたのですが、翌日、衝撃の結末が。オスのカワセミが沢沿いで死んでいるのが見つかりました。激しい攻防の最中に斜面や木に衝突してしまったのでしょうか？縄張り争いは命がけのようです。

メスは相変わらず元気に飛び回っています。春にパートナーができて、園内で繁殖してくれるといいのですが。



相手の口ばしをくわえて動きを封じます



一時休戦？並んで枝にとまる姿も



相手が水の中でも容赦なく抑え込みます

<冬の生き物記録>

1月は、ミニ観察会や高校生の校外学習など、来園者の方々と園内を観察する機会が多くありました。目立った生き物が少ない時期ですが、生き物の痕跡や冬の過ごし方を観察しました。

■ソシンロウバイの花■

厳冬期にウメのような香りを放ち、私たちを楽しませてくれる花です。こんな季節にだれが花粉を運んでくれるのだろうと観察していたら、晴れた日には花の周りをツマグロキンバエというハエが飛びかっけていました。強い香りは、少ない虫たちを確実に誘うための戦略なのでしょう。



ミニ観察会の様子
カヤネズミの巣を探す



ソシンロウバイ

■ヤマアカガエル産卵■

1月16日にはヤマアカガエルの卵塊を確認しました。この10年の記録と比べると、半月近く早い産卵です（第17号参照）。この冬は例年より冷え込まない日が続いていて、池が凍ることもほとんどありません。12月から鳴き声を聞くこともちらほら。早い産卵もこの気候が影響しているのかもしれませんが。

■繭いろいろ■

落葉した木々の梢などには繭がついています。この冬は特に、ヤマユガの中間の繭をよく目にします。同じ繭でもその形はバリエーション豊かです。網状で中が透けているのはクスサン、鮮やかな緑色はウスタビガ、淡い黄緑色はヤマユの繭です。去年の夏にこれらの繭から羽化した成虫が産んだ卵がどこかで冬を越していることでしょう。1枚の葉でくるまれたような繭のシンジュサンはさなぎで越冬するので、中身（さなぎ）入りの可能性あり！また、カイコの祖先であるクワコ（カイコガ科）の繭も見つけました。



クスサン



ウスタビガ



ヤマユ



シンジュサン



クワコ

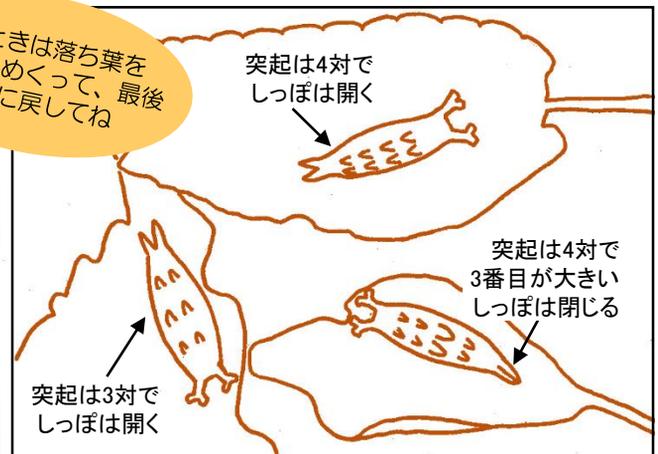
■落ち葉をめくると…■

エノキの木の根元では、アカボシゴマダラ、ゴマダラチョウ、オオムラサキの幼虫が落ち葉の布団をかぶって冬越しています。3種はそっくりですが、背中中の突起を見ると見分けられます。

アカボシゴマダラはひらひらと優雅に飛びきれいなチョウですが、人による放蝶がきっかけで広まったといわれている外来生物です。オオムラサキやゴマダラチョウはなかなか成虫に出会うことはありません。これらもぜひ美しいチョウの姿を見たいものです。



落ち葉の裏にくっついて越冬する幼虫



傷病鳥獣救護の情報

※救護の情報やバックナンバーは、ホームページで見られます。

神奈川県 野生動物救護

検索

自然環境保全センター（旧自然保護センター）では、傷病鳥獣の救護業務として、県民の方により持ち込まれた県内の傷ついたり弱ったりした野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を収容し、必要に応じて治療やリハビリを行い、野生に戻す業務を昭和53年（1978年）から行っています。この「かわせみ通信」では、持ち込まれた野生動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報を掲載しています。

● 2019年10月～12月の報告 ●

救護実績

【救護件数上位5種】

種名	件数
タヌキ	7
キジバト	6
オオバン	4
スズガモ	3
メジロ	3

私たちが衝突などで救護されました



ヤマガラ



オオバン



キビタキ

【主な救護原因】

鳥類の原因	件数
ガラス窓などへの衝突	15
ネコなどに襲われる	8
交通事故	4
粘着剤に絡む	1

哺乳類の原因	件数
疥癬症(かいせんしょう)	5
交通事故	2
ネコなどに襲われる	1

活動内容

10/19 救護動物特別公開（来場者数 23名） 主催 ※1 協力 ※2、3

12/14 傷病舎大掃除（参加者数 24名） 主催 ※3 協力 ※1、2

※1 当所 ※2 野生動物救護ボランティア ※3 NPO法人 野生動物救護の会

● 実施報告 救護動物特別公開「バードストライク」 ●

10月19日、朝の雨が止んだ曇天の中、県外からも来場されました。今回は、当施設の40年分（1978年度～2017年度）のデータからバードストライクをテーマにしました。バードストライクは、鳥が人工の構造物に衝突する事故のことを言いますが、窓ガラスへの衝突と交通事故を中心に展示物にまとめたものを、傷ついた動物たちと併せて観ていただきました。



救護された種類

救護件数上位10種

種名	件数
1 キジバト	263
2 ツバメ	257
3 スズメ	243
4 ヒヨドリ	201
5 メジロ	121
6 ドバト ※	112
7 ムクドリ	108
8 トビ	89
9 カルガモ	88
10 ゴイサギ	78

どれも私たちの近くで暮らしている鳥ばかりです。

私たちの豊かな暮らしが、身近で生きている野生動物に影響を与えていることがわかります。

※現在は、ドバトの受け入れは行っておりません。

救護件数が多い時期

図のように月別では6月が増えます。それは、多くの鳥の子育ての時期と重なっているためです。親鳥はエサを探しまわっていたり、ヒナは飛ぶ練習中などに事故に遭いやすいと考えられます。また、秋から冬にかけては、渡り鳥が移動の途中で事故に遭いやすいと考えられます。

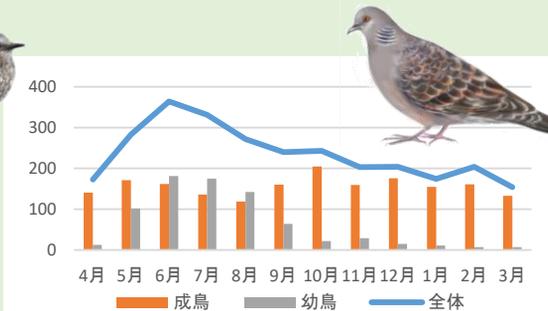
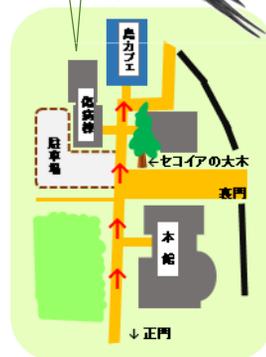


図 月別受け入れ件数

展示物は、2020年4月頃まで傷病棟のエントランスでご覧いただけます。見に来てね。



写真やイラストの提供、データのとりまとめ、展示物の作成にあたりNPO法人 野生動物救護の会の皆様、野生動物救護ボランティアの皆様にご協力いただきました。

次回は「換羽・換毛」をテーマに、2020年3月22日（日）開催予定です。詳しくは、HPをご覧ください。

愛情たっぷり?!

ヒメアマツバメの成長記録

— だ液入り虫ダンゴの試み —

海老名市内で救護されたヒメアマツバメのヒナ（個体No.190239）を10月26日に受け入れました。過去35年間（1985年～2019年12月31日）の当施設の記録では、75羽を救護してきましたが、そのうちヒナはわずか7羽、全体で放野したのは75羽中13羽でした。今回はヒナの救護の試みと成長の記録を紹介します。

ツバメに似ているけど、ツバメじゃないよ。



ヒメアマツバメの巣↑
イワツバメの巣の上に羽毛や植物で増築している



ヒメアマツバメ成鳥↑
だ液を提供

どんな鳥？ ヒメアマツバメ（アマツバメ目アマツバメ科）

1年中見られ、市街地や大きな建物などの人工物に巣を作り、4月から12月頃にかけて2回から3回程度子育てをします。飛びながら寝たり水を飲んだりすることができます。

県内では、建て替えやフンの害、鳥インフルエンザの影響で巣が壊されるなどにより、繁殖する個体数が減少しているとされています。

受け入れ当初は、まだ親鳥にエサをもらっているヒナでした。

ヒメアマツバメの親鳥は、空中で捕らえたカやハエなどを喉の中で唾液で固め、ダンゴ状にしてヒナに与えます。健康な親鳥のだ液は、消化を助け、ヒナの免疫力を高めることが知られています。幸い、親鳥ではないものの同時期に救護された成鳥（個体No.190227）がいたので、だ液を提供してもらい虫ダンゴ作りを試みました！虫ダンゴは救護から8日間、30分間隔で作り1日10回以上ヒナに与えました。



↑ヒメアマツバメのヒナ
握力はやや弱いものの、岩などにしがみつく習性は見られました



↑腹部周辺はまだピンク色の地肌が見えていました

両足の指に人毛のような細い糸が絡まっていました！



だ液入り虫ダンゴ作り



成鳥の口内にエサのフタホシコオロギを入れます



飲み込ませずにコオロギを取り出し、だ液を採取します



コオロギ、ミルワーム、すり餌などを入れてすりつぶす



ダンゴ状にしてヒナに与えました！

えっ 食べられないの?!

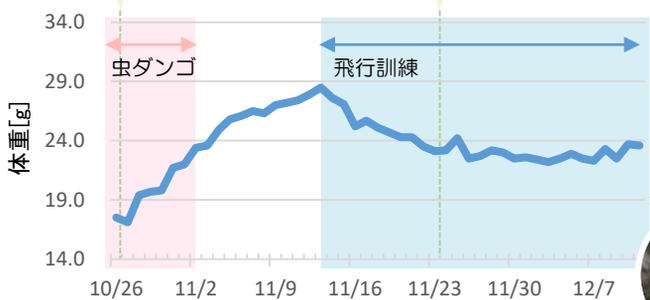
ミルワームも入って高タンパク！さらにビタミン剤も加えました



10月27日



11月24日 翼開長 約300mm



ヒナの体重推移

その後は、体重の増減に注意しながら、30分から1時間おきにコオロギそのままを与えました。ただ、飛びながらエサを捕る習性のため、自分で食べることはなく、強制的に口を開けてエサを与えなくてはなりません。

飛行訓練、そして放野

成長とともに握力も強くなり、屋外ケージの中で飛行訓練を重ね、垂直にしっかりとしがみつけるようになりました。この飛行訓練を経て12月11日の暖かい日に放野しました。



ボランティアの方にもダンゴ作りにご協力いただき、放野することができました。